

三重塔 国宝

この3層の塔は、最初は1143年に崇徳天皇（1119～1164年）の妃である藤原聖子（皇嘉門院、1122～1182年）の命を受けて建設された。現在の建物は1180年に興福寺の伽藍全体が破壊された直後に再建されたものであり、今日の興福寺における最も古い建築のひとつとなっている（もうひとつは北円堂）。

高さ19メートルのこの三重塔は、その優雅な外観で知られており、平安時代（794～1185年）の仏教建築の優れた一例とされている。1層目には4枚の板絵があり、そのそれぞれには4人の仏陀（東向きに薬師、南向きに釈迦、西向きに阿弥陀、北向きに弥勒）がそれぞれ千体描かれている。

内部の聖域の柱や楣、また天井、内壁、4つの扉の内側は、すべて花柄の唐草模様や仏陀、菩薩、四阿、また支援者と思われる人物たちの絵など、豊かな装飾がほどこされている。さらに、弘法大師（774～835年）が興福寺に設置したとされる女神・弁財天の像が、中央の柱の東側に据えられ、そのまわりを15体の脇侍（童子）が取り巻いている。弁財天の冠には神道風の鳥居があり、その上には老人の顔をした蛇がとぐろを巻いている。このことは、この像がインド仏教の神である弁財天と日本の土着の神である宇賀神とが合体したものであることを示している。